

59

古活字本医書の出版で知られる梅寿と その寛永5年版『素問/靈枢註証発微』について

町 泉寿郎¹⁾, 小曾戸 洋²⁾

¹⁾ 二松学舎大学, ²⁾ 北里大学

かつて書誌学者川瀬一馬は「梅寿軒の医書開版について」(『書誌学』9号, 1967)において、慶長13年(1608)から寛永3年(1626)までに梅寿が活字印行した医書31種を時系列で掲出し、梅寿がこの19年間における「医書開版の中心」にあったと述べ、近世最初期の医書出版史上における梅寿の意義を強調している。またこれ以後の活字本を見出だせなかったことから、寛永3年以降は「附訓刻整版本の刊行に転じてゐる様」だと述べ、かつ梅寿の名を刻した附訓刻整版本の中には梅寿自身が活字本から整版本に重版したのではない「他の書肆の所為」によるものが混じる可能性を指摘している。

その一方で、梅寿その人については、「医師であらうと思はれたが、未だその詳伝を明らかにし得ない」, 「延寿院玄朔の刊語のある『万病回春』(慶長16年古活字版)などを印行してゐる所からすれば、やはり玄朔門と考へてよいであらう」と推測の言に終始している。そこで本発表では、梅寿という人物について若干の補足を試みたい。

梅寿に関する資料は決して多くなく、最大の日本医人伝である宇津木昆台『日本医譜』70巻でも、巻30に「梅寿 失氏 梅寿著有諸疾禁好集」(巻35にもほぼ同文)と簡単に記されるのみである。また吉田宗恂撰『歴代名医伝略』2巻(慶長2年<1597>活字印, 宮内庁書陵部所蔵)の重刊本(寛永3年<1626>活字印, 国立国会図書館所蔵)の巻頭に「法眼 意安 恂 撰/門人 梅寿/宗和 刊行」とあることから、吉田宗恂(1558~1610)の門人であることが判明する。一方、『玄朔門人誓詞』(慶應義塾大学図書館所蔵)等にその名は見出せず、曲直瀬玄朔(1549~1632)の門人である可能性は低いと思われる。

最近、梅寿が活字印行した明・馬蒔撰『黄帝内経素問註証発微』『黄帝内経靈枢註証発微』が古書市場に現れた。漢方鍼灸界の重鎮として知られた藤田六朗氏(1904~2004, 旧制金沢医科大学卒, 龍野一雄・細野史郎に師事)の旧蔵にかかる。一本は慶長14年(1609)印行の『黄帝内経靈枢註証発微』6冊で、「慶長十四己酉年六月朔梅寿刊」の刊記を持つものであり、これは梅寿が活字印行した医書のうち最早期の『黄帝内経素問註証発微』12冊(慶長13年<1608>12月印行)の翌年に当たる。同版に国立国会図書館所蔵本(WA7-191)がある。

別の一本は従来報告されることがない寛永5年(1628)印行の『黄帝内経素問註証発微』12冊・『黄帝内経靈枢註証発微』存5冊(版式一四周双辺, 有界線, 每半葉10行22字, 黒口, 上下花魚尾, H 21.4~6×W 15.9~16.1)である。『靈枢』は刊記があるべき第6冊を欠くものの、『素問』『靈枢』ともに書題・冊数・篇名等を朱筆で打付書きにした栗皮表紙をかけ、各冊書背に「共十八」の書入れがあり、書型も揃っていることから、寛永5年に一度に印行されたと考えられる。これによって従来知られていた梅寿の活字印刷時期の下限が引き下げられる。梅寿の活字印刷はほぼ「註証発微」に始まり「註証発微」に終わったとも見られ、かつ書肆道伴による寛永5年刊の附訓刻整版は梅寿の寛永5年印本を底本にした可能性が高い。また『素問』第11冊末にある刊記「寛永第五歳戊辰初秋良日猪子梅寿斎宗和重刊」から、梅寿が「猪子」姓を名乗り、また吉田宗恂門に相応しく「宗和」と字(道号)したことがわかる(『歴代名医伝略』では、梅寿と宗和の関係がいまひとつ明確でなかった)。この他に寛永6年(1629)刊の呉崑『医方考』の刊記に「嘗寛永六歲四月中旬/書林猪子梅寿新刊」とあるが、寛永5年以前に梅寿が猪子姓を名乗った例は知られていない。『玄朔門人誓詞』を見ても、玄朔門人が字(道号)だけの名乗りから姓字を名乗る例は寛永10年頃に始まっており、医家が俗姓を名乗るところに時代の動きを感じさせるとともに、梅寿が医家から書肆に移行したさまを物語る。